

「夢十夜」の「第一夜」について

福田 金光

On “The First Night” in “Ten Nights of Dream”

Kanemitsu Fukuta

I. はじめに

1. 思っ、ままにならぬ女の死は、男の夢である。憎からぬ男を百年待たせることは、女の秘めた願ひであろう。百年の後、女が清楚な白百合に化生して、男に逢いに來る。愛が成就する。こう読んでしまえば、「夢十夜」の第一夜は簡明である。

塚越和夫氏は、「夢十夜」の「解説」で¹⁾「たとえば第一夜、表面的には恋と死とをロマンチックに歌い上げた美しい作品であることはわかるが、ていねいに読むと、よくわからなくなる。『百年待つ』という時間に何か意味があるのか、現実にはもともと無理な時間の設定である。とすれば、象徴的なものに過ぎないのか。『真白な百合』は夢の中の愛人の象徴だろうか、それとも『暁の星』がそうなのか。『百年はもう来ていたんだな』という最後のことは、『自分』が死んだ恋人と再会したことを意味しているのか、それとも『自分』は、結局、夢の中の『現実』では恋人と会えなかったのか。歳月の経過もなぜ『日』がのぼったり沈んだりすることで表わしたのか。さまざまな解釈が可能なので、それによって作品全体の意味が違ってき、冒頭に要約したのとは逆に、薄気味悪い作品だとの印象も受けるのである。(下略)」

と、述べている。これはもち論、読者に探究心を起こさせるための筆法であろうが、「ていねいに読むとよくわからなくなる」のを、よくわかるようにするには、どのように読めばよいか、が問題である。

2. 氏は上記の叙述の前に、「漱石の見た夢を十夜にわたって記録した体裁になっているのが『夢十夜』である。むろん、ほんとうの夢の世界がここに記されているように整然としているはずはなく、そこに漱石の虚構が加わり、物語的に秩序が整えられたことは明白である。それにしても、現実の世界を描くのと異なり、そこではどんな不条理を描くことも可能であり、空想の翼を自由に駆使して自己の暗部をカモフラージュしながら表現できる。」

と記して、内容のわかりにくさの理由を「①夢に虚構が加わり秩序が整えられていること。②夢には、どんな不条理なことも自由な空想も許されること。③漱石の暗部がカモフラージュされていること。」としている。

確かに①の理由のように、夢に虚構が加わり秩序が整えられたら、本人以外、原形に戻し復させることは不可能であろう。しかし、作者は「こんな夢を見た。」と冒頭に夢であると言明しているのであるから、その虚構や秩序づけは趣意を明確にし、理解を容易にさせる範囲でとどまっているであろう。とすれば、夢の完全復原はともかく、趣意の推定は必ずしもできないこ

とではない。②については、夢にも通則があって、それをはずれたら夢とはいえないのであるから、(実際に夢でなくても同様である。)その通則が手がかりとなる。③漱石の暗部のカモフラージュは、この作品だけで、すべてを説明することは困難であるにしても、今までに論及されている漱石研究の資料によって、種々の検討は可能であろう。

「夢十夜」の研究には、言うまでもなく、本文そのものを詳細に究明することが、最も肝要であるが、その名も夢に似た「漾虚集」の諸作品、特に「幻影の盾」、「薤露行」、「趣味の遺伝」、および漱石の白昼夢といわれる「永日小品」は、逸することのできない資料であろう。

II. 男と女の間柄

1. 「こんな夢を見た。」と冒頭にあるのは、「夢十夜」中、第一、二、三、五夜だけである。これらは、特に夢らしい夢ということかも知れない。

「腕組みをして枕もとにすわっている」のは勿論男で、彼は思案の最中か、行動を禁ぜられているか、または、積極性がないのか、「腕組み」をして傍観的である。「枕もと」とあるからには、「仰向きに寝た女」の最も近い存在にちがいない。女は死を前にして、「静かな声でもう死にます」と言う。前から死にそうな状態にあって、いよいよ死期が来たのであろう。女はよく覚悟ができていて、いささかの取乱しもない。悟道に徹しているのかも知れないが、男の愛情の確信もあるのであろう。

このあと、「死ぬ」ということばが11回繰り返される。「静かな声」は合わせて3回。女は静かに「にっこり笑って見せ」る余裕さえもって、死んでいこうとしている。しかし男の眼には、「真っ白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色はむろん赤い。」これは女の男に対する情愛を示す。そして、女は「とうてい死にそうには見えない。」のである。男は「透きとおるほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思う」。

到底死にそうにない女か死ぬ、という夢は、それを見ている男にとって、別れたくない女と別れなければならない、ということであろう。

「大きな潤いのある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真っ黒であった。その真っ黒な眸の奥に、自分の姿があざやかに浮かんでいる。」とあるが、眼の中がただ一面に真っ黒というのは、まことに不気味である。黒は死の色、女はまちががなく、やがて死ぬ運命にある。そして、男の姿が女の真っ黒な眸の底に鮮やかに浮かんでいるとは、男が女に心から愛されているということであろう。

「薤露行」のエレーンが合わぬ睨のあいだより男の姿の無理に瞳の奥に入らんとするを、幾たびか払い落とさんとつとめたれど詮なく、いつの間にかその人の姿はすでに睨の裏に潜」んでしまっ、ランスロットに同化するほど愛してしまうのと同じ、と思われる。

また、女が死ぬ、と言えばすぐ死ぬかと思ひ。頬や唇の赤い色や黒眼の色沢を見ては、これも死ぬのかと思う定見の無さは、夢の中には否定がないからである。

「じゃ私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに写ってるじゃありませんか。」と女が言うのは、女の眸に男の姿が写っているのを指して言っているとすると、その姿は男には見えるが、女は自分で自分の眸を見ることはできないはずである。しかし、これも夢特有の現象で、夢の中では自己と他人の区別が無くなるのである。

男と女の間答にしても同様で、男の自問自答が、夢では男女が問答しているように見えるだけである。そして、その素材は、ほとんどが本人の過去の体験に拠る、というのが夢の通則で

ある。それでは漱石に、どんな原体験があったのであろうか。

長い髪で、輪廓の柔らかな瓜実顔で、真白な頬で唇が赤くて、長い睫で、大きな、潤いのある黒い眼の女。そして、女の化生と思われる、章末の「……すらりと揺らぐ茎の頂に心持首を傾けていた細長い一輪の蕾が、ふっくらと瓣を開いた。真っ白な百合が鼻の先で徹える程匂った。」から推定される、すらりとした、心持首を傾けている、細長い首の女。そうして白百合と密接な関係のある女。そういう女を漱石の周辺から洗い出す作業が、多くの研究者によって試みられてきた。

2. (1) 宮井一郎氏は、²⁾「追羽子や君稚児髻の黒眼勝」の小見出しで、「夢十夜」の「第一夜」の女「三四郎」の美禰子、「それから」の三千代の黒眼の働きなどを述べた後、「彼岸過迄」の千代子の「潤沢の饒かな黒い大きな眼を；上下の睫の触れ合ふ程、共に寄せた時は、此の女から夢にも予期しなかった印象が新たに彼の頭に刻まれた。」を引き、「いま大胆に断言すれば、漱石はこのように『黒眼勝』の女をヒロインに描いているのであるが、それは単に容貌や風姿をそこに求めただけではなく、作品のテーマやモチーフもすべてこの女との恋愛体験のなかから得ている。」としている。そして、その女とは、「永日小品」の「心」の女で、芸妓であると、博引旁証するのである。

³⁾「百合の花については、おそらくすべての漱石研究家がつまずいている。(中略)そこで最初に考えてみなければならないのは、この『夢』のなかの『長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな瓜実顔を其の中に横たえ』たヒロインのイメージに、いったい百合のほかに、どんなふさわしい花があるか、ということである。」と述べ、「ましてそれが漱石の生来愛好する花であって見れば、原体験の有無などという疑問は起こりえない」としている。

(2) 小坂晋氏は、明治41年5月11日の大塚楠緒子宛の手紙「拝啓御手紙拝見致候先月中より御病気の趣始めて承知ことに御軽にてはなき御容子切に御加養を祈り候(下略)」を引用し、更に「この楠緒子の結核を心配する手紙の直後、今頃になって前年九月に亡くなった文鳥の死を描く。文鳥に楠緒子を象徴していることは間違いない。続いて『夢十夜』一夜に、愛する女が死ぬ哀切な夢を描くのである。」と述べている。そして、「文鳥は白い首を一寸傾けながら此の黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。」を引いて、「右の文は、『それから』の三千代や『夢十夜』一夜の百合のような女性と重なるイメージを持つ。(下略)」として、楠緒子を第一夜の女とする。「人並みすぐれた予見力を持つ漱石が楠緒子の死を予感」して第一夜の夢を見た、と言うのである。

また、⁵⁾「この百合のイメージはどこから来たかということ、要するに大塚楠緒子の、雨の中、白く浮かび上がる美しい顔やえり足——特に漱石文学に頻出する、すらりと揺る百合のような細長いえり首から来ており、それは更にロッセッティの英詩「在天の処女」の百合や楠緒子の作中、しばしば描かれる百合の花及び伊香保の百合の香にまつわる訣別の思い出に連合して作られたイメージであると思う。」と述べている。

(3) 江藤淳氏は、まず「行人」の⁶⁾三沢の「其娘さんは蒼い色の美人だった。さうして黒い眉毛と黒い大きな眸を有ってゐた。其黒い眸は始終遠くの方の夢を眺めてゐるやうに恍惚と潤って、其処に何だか便のなささうな憐を漂よはせてゐた。(下略)」を引き、この女は漱石の兄和三郎直矩の妻ふじで、僅か三ヶ月で離縁となり、その後へ登世が来た。和三郎は、ふじにも登世にも親しまず、その亡き後は、自らみわという女性を選んだが、これらを考え合わせると、このような顔立ちの嫁をつづけて選んだのは、多分親の小兵衛直克の好みであり、その背後には、

彼の二度目の妻で、直矩や漱石の生母千枝の若いころの姿の記憶があったのかも知れない。(下略)](以上要約)と述べ、また、⁷⁾「百合は西欧文学ではキリスト教的純潔の象徴として用いられるのが普通であり、かりに英国世紀末芸術が投影しているとしても、それは構図の域にとどまっているように思われる。だとすれば「夢十夜」や「それから」の百合は、Dawn of Creationの「天」と「地」の倒錯同様に個人的な秘密だと考えるほかはない。なぜ百合が性と「罪」の匂いを含んだ濃密な情緒の象徴たり得るか。それはとりもなおさず百合が夏の花であり、明治23年夏のある日の忘れがたい経験に結びついているからではないか。

その場に百合の花は実際にあったかも知れず、またなかったかも知れない。だがいずれにせよそれは性と『罪』の匂いを含んだ体験であり、その相手は嫂の登世以外にはあり得なかったものと思われる。いま登世の写真をかたわらに置いて『夢十夜』の女の顔の描写を検討してみると、『長い髪を枕に敷いて、輪廓の柔らかな瓜実顔を其の中に横たへ』た女のイメージは、ほとんどそのまま銀杏返しか銀杏崩しに結っていると覚しい髪を解いて垂らした場合の登世の顔と重り合う。あるいは、この描写の背後には、翌二十四年春から夏にかけての病床の登世の記憶が隠されているのではないであろうか」と述べている。

(4) 以上三氏の説は、それぞれ詳細な研究の後に立論されたもので敬服に値するが、いまそのいずれを是とするかの資料は、まだ発見されていない。

ただ考えられることは、宮井説は資料が少なく推定が多い。確かに「永日小品」の「心」の女は、この第一夜の女と同じタイプの女と思われる。「その顔は、目といい、口といい、鼻と違って、離れ離れに叙述することのむずかしい——いな、目と口と鼻と眉と額といっしょになって、たった一つ自分のために作り上げられた顔である。百年の昔からここに立って、目も鼻も口もひとしく自分を待っていた顔である。百年ののちまで自分を従えてどこまでも行く顔である。」とあるから、第一夜の女をこの女に擬することはできる。このあとの叙述から推定して、芸妓のように思われるという点も異存はない。しかし、一般論としてではあるが、百年も逢うのを待たねばならない間柄というものは、芸者との間には成立しにくいのではなからうか。

小坂氏の楠緒子説は、資料も豊富で一番わかりやすいが、友人の妻君が死ぬことを期待して、百年後にその女と婚することを果たして漱石が思うであろうか。まして、これが氏のいうように相聞ということになると、彼のような用心深い男のすることであろうか、と信じがたい。

江藤氏の嫂登世説は、「赤い日」を情熱と罪業の象徴と考えれば通じる。しかし第一夜に関する限り、「赤」の中には、「まこと」や「情熱」は感ぜられるが、「罪業」は少しもない。

登世であるにしても、二人は嫂弟の線を越えてはいない。

Ⅲ. 女の死と埋葬

1. 女は死に際して「死んだら埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って、そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。(下略)」と言う。

埋葬する夢は、隠さねばならぬ秘密があることを意味する。男が女から、死んだら埋めてくれと頼まれる夢を見るということは、その男女の間に、人に言えない秘密があるということであろう。もっとも、過去に女からそう言われた事実のある場合は、その経験の想起である。

掘る道具は、真珠貝である。真珠＝マタマ＝真魂とするならば、小坂晋氏の引用する「夢十夜」の三ヶ月前の大塚楠緒子の詩「忘れはてし」は無関係ではなさそうである。

「(前略)こなたかなたに存らうる、/二つの魂の連れ立ちて、/み空に契るめおと星、/星にな

りぬと一夜見し、 / そのあこがれの夢よりぞ、 / 夢を恋いつつ夜な夜なに寝る。」

漱石と楠緒子の相聞の詩ではないにしても、二つの魂が連れ立ち、み空に契って、めおと星となったという夢は、真珠貝から生まれる真魂の夢であろう。また――

「頭をまとう、糸に貫いた真珠の飾りが、湛然たる水の底に明星ほどの光を放つ。」と「幻影の盾」にある「真珠」は、「まこと」であり、「思いつめたる心の影」である。そして、「盾の形は望の夜の月のごとく丸い。鋼で饅頭形の表を一面に張りつめてあるから、輝ける色さえも月に似ている。縁をめぐりて小指の先ほどの鋏がきれいに五分ほどのあいだを置いて植えられてある。(中略)ところどころはげしく光線を反射してよそよりも際だちて視線を襲うのは昔象嵌のあった名残りでもあろう。(下略)」と記されている幻影の盾は、真珠貝について述べられていることと符合する。「貝の裏に月の光が差してきらきらした。」「真珠貝の裏に月の光が差した。」と第一夜にあることとも一致する。まちががなく、真珠貝は幻影の盾である。女に「ただ懸命に盾の面を見たまえ」と言われて、無言のまま盾を抱いて池の縁にすわったウイリアムが、次第に「見れども見えず、聞けども聞こえず、常闇の世に住む」かとわれを怪しむ時、「――身をも命も闇に捨てなば、身をも命も、闇に拾わば、うれしかろうよ」と女の歌う声が百尺の壁をもれて、蜘蛛の国の細き通路より、「聞こえてくる。(この百尺の壁や蜘蛛の国の細き路は、「永日小品」の「心」の女が「自分」を無言で誘って行く場所によく似ている。)そして彼は、「足を乗する地もなく玲瓏無比の真中に一人立つのである。すると、死んだはずのクララが白帆の中に赤い帆をはさんだ舟で近づいてくる。幻影の世界で二人は逢うのである。真珠貝で掘るということは、真剣一途に、ただ一筋に思いつめて、幻影を見るということであろう。

「天から落ちて来る星の破片」は「薤露行」に「可憐なるエレーンは人知らぬ董のごとくアストラットの古城を照らして、ひそかに墜ちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を経たり」とある「星」と同じく、第一夜の女は生きていたとき「星」であった。であるから死んだとき、「星の破片」となって「天から落ちて来る」のである。

2. 自分が「何時逢いに来るかね」と聞くと、女が「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それから又出るでしょう。そうしてまた沈むでしょう。――赤い日が東から西へ、東から西へと落ちゆくうちに、――あなた、待っていられますか」(中略)と言う。

「そのうちに、女の言った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それが又女の言った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

自分はこういう風の一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分からない。勘定しても、勘定しても、しつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行った。」

この短い文章の中に「日」(天道を含む)が7回、「赤い」(唐紅を含む)が5回繰り返されている。これは、日数が数知れずたつことを具体的に表わそうとする夢独特の方式(夢には抽象がない)であるとともに、その属性の「赤」を強調するためでもある。

赤は、夢では情熱を表すことになっているが、「薤露行」では、「やがてわが部屋の戸張を開きて、エレーンは壁に釣る長き衣を取り出す。燭にすかせば燃ゆる真紅の色なり。室にはびこる夜を呑んで、一枚の衣に真昼の日影を集めたるごとくあざやかである。」「紅に人のまことはあれ。恥ずかしの片袖を、乞われぬに参らす。(下略)」「ランスロットは長き袖を眉のあたりに掲げて『赤し、赤し』と言う。」赤い日は、女の言ったとおり、つまり女の約束したとおり、男に対する「まこと」即ち愛情の象徴である。この第一夜の「赤い日」には、第七夜とは違って、汚れや罪の痕跡は感じられない。ただ、「赤い日が東から西へ、東から西へと落ちてゆくうちに」

という中には、漱石が、東京から、松山、熊本、ロンドンへと落ちて行く、ことも含まれており、したがって、空間が時間に変じて、女から次第に離れて行く感じがある。

3. 「百年、私の墓のそばにすわって待ってください。きっと会いに来ますから」と女が言う。この前後、「百年」が5回繰り返されるが、この「百年」の意味が問題である。「幻影の盾」に、「百年の齢はめでたくもありがたい。しかしちと退屈じゃ。(中略)終生の情けを、分と縮め、懸命の甘きを点と凝らし得るなら——しかしそれが普通の人にできることだろうか?——この猛烈な経験を嘗め得たものは古往今来ウィリアム一人である。」とあって、百年は実数ではなく、凝縮の世界であり、思いつめた状態である。

柄谷行人氏は、ここを引用して⁸⁾『普通の人に出来』ないような『猛烈な体験』とは、むしろ『死』を意味しており『幻影の盾』とは生から死へと飛躍する境界を意味している。」としている。しかし、死ななければ女に会えない、というより、夢では、形を変えなければ会えない、という意味であろう。あるいは、想像の世界でのみ可能ということである。現実には、死より解決の方法がないのであろうけれども。

4. 「真っ黒な眸の奥に自分の姿があざやかに浮かんでいる。」と、「黒い眸のなかにあざやかに見えた自分の姿が、ぼうっとくずれて来た。」とを並置して、越智治雄氏は、⁹⁾「かつて実在していた自己を今、失っているという喪失感、その自分に出会うまでは耐えつづけ待ち受けねばならぬという自己発見の課題こそ、神秘的な愛の交感を寓したこの夢の基盤なのではないか」とし、「失った故郷への回帰を念じている」とする。そして——

「なるほど、第一夜は幸福な夢にも見えるだろうが、必ずしもそうとはかぎらない。遺言どおり『自分』は星の破片を拾って女の遺骸を埋めた土の上に置く。星の破片を抱いているうちに彼の胸と手は少し暖かみを感じることができた。言葉を換えれば、『自分』の胸と手はほとんど冷えている。この美しい夢で痛切なのは、その胸を暖める愛であるよりは、そうした愛への憧憬を必至とする存在の喪失感、そこから冷え冷えとした感覚だと言ってよいので、ここにちりばめられた真珠貝、月光といった冷たいイメージもまたそれと照応する。つまりこれは漱石の痛き夢なのである。もちろん、第一夜は愛の奇跡によって百年ののちに『自分』を失った自己を見いだして終わっている。」と述べている。

確かにそのようにも解けるところであるが、黒い眸のなかに見えた「自分」の姿が崩れて来るのは「自分」の涙でぼうっとしたのであろうし、死んだ女の象徴である「星の破片」を「抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。」のは、女の死体の残温のせいであろう。勿論、物理的には、星が天空から落ちて来るときの空気との摩擦による温かさである。「丸」く「角が取れて滑らか」なのは、女の墓標にふさわしい。

5. 「自分は苔の上にすわった。」「しまいには苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女にだまされたのではなかろうかと思いだした。」とあるが、苔は普通緑色である。緑は未了である。また、夢判断では、嫉妬心や敵意を表すともいう。夢の思考では、同じ感情を伴うイメージが結合し、または、外連合(語呂合せのように内容に無関係な連合)によりイメージが結合することが多い、というが、後者の思考法では、苔=コケ=虚仮となり、苔に坐るということは、既に実の世界を離れ虚の世界に入ったことを表しているといつてよい。この虚の世界とは、死、幻想の世界と考えられる。あるいは、こけには愚という意味もあるから、愚の骨頂をきわめる、と考えることもできる。

Ⅳ. 女の化生

1. 「すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。」のは、若い女が男に抱きとめられることを期待して身体をもたれさせてきた、と解してよいであろう。「見る間に長くなって丁度自分の胸のあたりまで来て留まった。」わけは、ハートを求める意と同時に、少し小柄の女性の背丈程度となったのである。「と思うと、すらりと揺らぐ茎の頂きに、心持首を傾けていた細長い蕾」は、「文鳥」の「文鳥は白い首を一寸傾けながら此の黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。」に照応するものであり、「漱石の思い出」にある「背のすらりとした細面の美しい女」である。勿論第一夜の女である。「一輪の蕾が、ふっくらと瓣を開いた。」のは処女が女らしくなったのであり、「まっ白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。」は、女の肉体の強い香りが、男に強い性的関心を起こさせたという意味であろう。

もっとも、夢には普通、においは余り出てこないということになっている。それを敢て、骨に徹えるほど、と表現したのは、現実の記憶が混入して、そのように思わせたのかも知れない。

「白」は清純、潔白、処女性を表すというが、強烈な匂いのする百合となると、性の象徴ともなる。「薤露行」のギニヴィアは「……身も魂もこれ限り消えて失せよと念ずる耳もとに、何者かからからと笑う声して夢は醒めたり。醒めたるあとにもなお耳を襲う声はありて、今聞ける君が笑いも、宵の名残りかと骨をゆるがす」と落ちつかぬ眼を長き睫の裏に隠してランスロットの気色を窺う。」

これは、「創造の夜明け」の「雷鳴」を想わせる。その前に天（女）と地（男）は、別れる前に熱烈な接吻を交わすが、「薤露行」では、別れる前ではあるが、「骨をゆるがす」「耳を襲う声」のあとで接吻する。すなわち、ランスロットは「女の前に、白き手を執りて、発熱かと怪しまるほどのあつき唇を、冷やかに柔らかき甲の上につけた。暁の露しげき百合の花弁をひたふるに吸える心地である。」これは第一夜に「自分は、首を前へ出して冷たい露のしたたる白い花弁に接吻した。」のとよく似ている。ここから考えると、第一夜の女はギニヴィアに近くなり、清き乙女エレーンは遠い存在となる。

しかし、同じく「薤露行」のエレーンの遺言「天が下に慕える人は君ひとりなり。君一人のために死ぬるわれを憐れと思え。陽炎燃ゆる黒髪の、長き乱れの土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星変わるのちの世までも消えじ。(中略) 睫に宿る露の珠に、写ると見れば砕けたる、君の面影のもろくもあるかな。(後略)」は、第一夜の髪の高い女が男に百年たったら逢いに来るといって死に、その真っ黒な眸の奥に浮かんだ男の姿が、間もなくぼうっとくずれるのと酷似している。

両者を併せると、第一夜の死ぬ前の女はエレーンであり、白百合となって百年後に現れる女は、罪業抜きのギニヴィアということになる。更に言えば、第一夜の男と女は、生前清い間であったが、百年後には、その愛を成就したということであろう。

「遥かの上からぼたりと露が落ちた」のは、勿論月の露で、白百合はここに、人間として女として生命を得たのであろう。花が「自分の重みでふらふら動いた」のは、男性への積極的な働きかけであり、男はそれに応じて接吻したのである。

2. 「暁の星がたった一つまたたいていた。」のは、星の破片が百年の歲月？ を経て再び星となって天上に戻り、その本来の生を得たということであろうが、その生とは、女のいる死の世界または幻想の世界に在ることであるから、男はこの時当然、女と同じ世界にいなければなら

ない。

『百年はもう来ていたんだな』とこの時始めて気がついた.]のは、女が約束どおり逢いに来た、という具体的事実から「百年」たった、と気がついたのである。

夢の世界の進行は、類似の感情と語呂合せに由ることが多い、というから、この最後の「暁の星」も、「赤い日」が夜の（死の）世界に入って「赤月（あかつき）となり、「日」が夜の（死の）世界に「生まれ」て「星」となった、のではないかという想像も、夢の世界のことだけに、思いつきに過ぎないと、言い切れないであろう。

V. 第一夜の筋と人物の形成過程

第一夜の夢は、漱石の諸文献と照合すると、単なる一夜の夢ではなく、過去十数年の夢が次第に形を成したものであることがわかる。

1. 明治36年8月15日の Dawn of Creation に、Heaven (天) —— 女, Earth (地) —— 男, kiss (接吻), the pale moon (青白い月), the stars (星), night (夜), tears (涙), they live wide apart (遠く離れて住む) など、第一夜のストーリーの中心となる人物や事柄や語句が既に出ており、江藤淳氏の指摘するように、第一夜はこの詩の裏返しのようなイメージである。裏返しとは、接吻が、この詩では最初にあるが、第一夜では、最後にあることである。

2. 明治36年11月27日の第一の詩に、I looked at her as she looked at me: (彼女が私を見たとき、私は彼女を見た。) 第一夜の、男の姿が女の眸に写り、女の姿が、男の目に写る場面の原形と思われる。

3. 明治37年頃の作とされている「鬼哭寺の一夜」は、前出その他の集成といってよい。あるいは、今まで変形して述べていたことを原体験に近い形でうたったものとも、考えられる。「折しもあれや^㉑枕辺に、/物の寄り来る気合して、/圓かならざる夢冴えつ、/夜半の燈に鬼気青し、/吾を呼ぶなる心地して、/石を抱くと思ふ間に、/仏眼颯と血走れり。/立つは女か有耶無耶の/白きを透かす^{うすくろ}輕羅に/^㉒空しく眉の緑りなる/仏と見しは女にて、/女と見しは物の化か/細き^{のん}咽喉に呪ひけん/^㉓世を隔てたる声立てて/われに語るは歌か詩か/『昔し思へば^㉔珠となる/睫の露に君の影/写ると見れば砕けたり/人つれなくて^㉕月を恋ひ/月かなしくて^㉖吾願/果敢なくなりぬ二十年/ある夜私かに念ずれば/^㉗天に迷へる星落ちて/闇をつらぬく光り疾く/古井の底に響あり/陽炎燃ゆる^㉘黒髪の/長き乱れの化しもせば/^㉙土に蘭麝の香もあらん/露乾て董枯れしより/愛、紫に溶けがたく/^㉚恨。碧りと凝るを見よ/未了の縁に纏はれば/^㉛生死に渡る誓だに/塚も動けと泣くを聴け』/……塚も動けと泣く声に/塚も動きて秋の風/夜すがら吹いて暁の/茫々として明にけり/宵見し夢の迹見れば/草茫々と明にけり。

㉑枕辺 →これは男の枕辺であるが、第一夜では女の枕辺。㉒空しく眉の緑りなる仏 →嫂登世の悼亡の十三句の一つに「細眉を落す間もなく此世をば」がある。したがって、鬼哭寺の女は嫂登世であろう。第一夜の女とも、だいたい重なる。㉔珠となる/睫の露に君の影/写ると見れば砕けたり →「其の真っ黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。」「黒い眸のなかに鮮かに見えた自分の姿がぼうっと崩れて来た。」と照応する。睫の露と、黒い眸との違いだけといってよい。㉕月 →「土をすくう度に、貝の裏に月の光が美しくきらきらした。」また「(土を)掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。」とあるように、月は見まもっているが、登世悼亡の句に「今日よりは誰に見立ん秋の月」があり、漱石にとって登世は月のよう

にも思われた。㉔吾願 / 果敢なくなりぬ二十年，→二十年は韜晦で，十二年と倒置すれば，登世死亡の明治25年+12年=37年で，この詩の作られた年となる。㉕天に迷へる星落ちて→「それから星の破片の落ちたのを拾って来て，かるく土の上へ乗せた。」で，鬼哭寺の女が迷える星で，それが地上に落ちたことがわかる。㉖黒髪の長き乱れ→第一夜冒頭の「女は長い髪を枕に敷いて」と照応する。㉗土に蘭麝の香→「湿った土の匂いもした。」となって，ロマン性がやや薄れ，どこか川辺の土の感じがする。㉘恨，碧りと凝る→「苔」であり，未了の縁のまま，思いの遂げられない状態であろうか。㉙生死に渡る誓→世を隔てたる声立てて，と共に，「女は静かな調子を一段と張り上げて，『百年待って下さい』と思いきった声で言った。」と照応する。

4. 明治37年11月，12月「ホトトギス」に掲載された，虚子・漱石の俳体詩「尼」も，第一夜の女と無関係ではない。

| | | |
|-----|------------------|----|
| 二十 | ㉔古の星きらめくと思ひしが | 漱石 |
| | 暁方の眉に落ち来る | 〃 |
| | 悟とは釈迦の作れる迷にて | 〃 |
| | 山を下れば煩惱の果 | 〃 |
| 二十一 | ㉕月もやみね花もやみねと狂ふなり | 〃 |
| | 三世の仏は猶更にやみね | 〃 |
| | 誰かいふ一念一誦功德ありと | 〃 |
| | ㉖紅炉に點ず雪はそもさん | 〃 |
| 二十二 | 夜といへる黒きものこそ命なれ | 〃 |
| | ㉗色を隔てて鈍き脈搏つ | 〃 |
| | 我を呼ぶ死手の烏の声涸れて | 〃 |
| | ㉘怪しき星の冥府に尾を曳く | 〃 |

㉔古の星きらめくと思ひしが / 暁方の眉に落ち来る→第一夜の章末「遠い空を見たら暁の星がたった一つ瞬いていた。」に照応するもので，この暁の星は古の星で，死の前後に眉を落とした女（登世）の再生が連想される。㉕月もやみね花もやみねと狂ふなり→登世悼亡の句「今日よりは誰に見立ん秋の月」「君逝きて浮世に花はなかりけり」「何事ぞ手向し花に狂ふ蝶」が想起される句であるが，中でも「花」だけは「百合の花」として女の身代りとして，第一夜に出現する。もっとも，同悼亡の句「聖人の生れ代りか桐の花」(其人物)の句趣とは異なる。㉖紅炉に點ず雪はそもさん→ November 29, 1903の英詩の her heaving bosom（波うつ胸）は紅炉にあたり，her snowy breast（雪の乳房）が雪に相当するとすれば，一念一誦の功德どころではない。第一夜では「真っ白な頬」「唇の色はむろん赤い」となっている。㉗色を隔てて鈍き脈搏つ→「抱き上げて土の上へ置かうちに，自分の胸と手が少し暖かくなった。」と関連があるのであろうか。㉘我を呼ぶ死手の烏の声涸れて / 怪しき星の冥府に尾を曳く→第一夜の女は，墓の傍で百年待って，と言うが，それは冥府へ来てほしいという誘いでもある。もともと百歳の後とは，死後のことである。

5. 明治38年4月の「幻影の盾」は，「思う人の唇に燃ゆる情けの息を吐くため」に「一心不乱」に「百年の生」「終生の情けを，分と縮め，懸命の甘きを点と凝らす」物語である。

騎士の恋第3期は「誠ありと見抜く男の心を確かめんため女，男にくさぐさの課役をかける。」時であるが，クララの意味ではなく事の成り行きはウィリアムに，その苦役を課することになる。

「^{ぬい}睡るウィリアムが眼を開いてあたりを見回す」と、「地面は一面の苔」で、「池の河まで進み寄る」とき、1丈余離れた岩の上に「一人の女が、まばゆしと見ゆるまで紅なる衣を着て、知らぬ世の楽器を弾くともなしに弾いている。(中略)糸に貫いた真珠の飾りが、湛然たる水の底に明星ほどの光を放つ。黒き眼の黒き髪の女である。クララとは似ても似つかぬ。『岩の上なるわれがまことか。水の下なる影がまことか。(中略)『闇に烏を見ずと嘆かば、鳴かぬ声さえ聞かんと恋わめ。——身をも命も、闇に捨てなば、身をも命も、闇に拾わば、うれしかろうよ。』この女は既に死んだクララであろう。ウィリアムはその誘いにしたがって「純一無雑の清浄界」に入ると、生前の姿のクララが現れる。そして、「ウィリアムは熱き唇をクララの唇につける。二人の唇のあいだには林檎の花の一片がはさまって濡れたままついている。」とあるから、二人の愛は完全に成就したのであろう。

ストーリーといい、人物といい、「鬼哭寺の一夜」や「尾」に似ているが、不気味さが減じ、新しくクララという清純な乙女を登場させている。つまり、一人の女を生前と死後に二分して二人の女にしているのである。

6. 同じ38年の11月の作「薤露行」は、原典の関係もあって、主要人物は、ランスロット(男)、ギニヴィア(王妃)、シャロットの女、エレーン(女)の4人となり、「幻影の盾」の女と対応させると、シャロットの女(蔦鎖す古き窓より洩るる梭の音の、絶え間なき振子のごとく、日を刻み月を刻むに急なるさまなれど、その音はあの世の音なり。)は「知らぬ世の楽器を弾くともなしに弾いている」女である。次に、「可憐」な「美しき少女」エレーンは、勿論クララである。ただし、エレーンは、ランスロットを慕うあまり、「われという個霊の消え失せて」精神が男に同一化してしまう女である。

エレーンはクララより積極的である。ギニヴィアは、ランスロットの問いに「逝ける日は追えども帰らざるに逝ける事はとこしえに暗きに葬むるあたわず、思うまじと誓える心に発矢とあたる古き火花」のある女である。もし登世と漱石との間に、「暗きに葬むるあたわ」ぬことがあったとしたら、第一夜の女は、登世が原形ということになる。しかし、第一夜の女は静かに落ちついている。「……墓に^う堰かるるあの世までも変わらじ」と男に言うギニヴィアは、章末で、エレーンの額に、ふるえる唇をつけつつ『美しき少女!』と言つて、不義性を削除すれば、エレーンに近いことを示している。もっともギニヴィアにはセックスの影が濃い。

7. 明治39年1月の「趣味の遺伝」は、男が戦死し、その墓に女が白菊を供えるという筋の話であるが、2人は郵便局で二、三分顔を合わせただけなのに、三代前の祖先たちの悲恋を再現するのである。百年の恋の、墓を隔てての実現は、第一夜と同じである。浩一と小野田の妹とが主要人物で、墓と花もある。

複雑化して女が3人になっていたのが、元に戻って一人になった。

8. 明治40年頃の作といわれる句に——

「姫百合に筒の古びやずんど切」

というのがある。この古びた竹製の花筒を墓に移して、植物性の女(あるいは複数でもよい)とその恋愛体験をじっくり思い出し、夢に見れば、第一夜ができ上がる。さかのぼって、

明治32年の句に、——

「寒徹骨梅を娶ると夢みけり。」

がある。梅も香りが高く、花は白い。その点白百合と似ている。梅といえば、「永日小品」の「心」の冒頭部分の「一羽の、小鳥」は、「頭の上に真っ白に咲いた梅の中から」「飛び出した」

のであった。

Ⅵ. む す び

1. 策一夜の女は、生前は①処女ではなく、②男を愛している。男と女の間柄は、①精神的に深く愛し合っているが、②それ以上の関係はない。③女の方が積極的である。
2. 死後、女は①遠く離れた空から毎日誠と愛を示し、男は②ただひたすらに、女を信じて逢いに来るのを待つ。③それは虚仮（虚無、愚、幻想）の世界のことである。
3. 化生して白百合となって現れた女は、①清浄な処女として生まれかわり、②同時に性的にも男を刺激し、③二人は愛を成就したのである。

参 考 文 献

- 1) 塚越和夫：文鳥・夢十夜ほか5編，p. 265，講談社文庫（1977）
 - 2) 宮井一郎：夏目漱石の恋，p. 126，筑摩書房（1976）
 - 3) 同 上 p. 13
 - 4) 小坂 晋：漱石の愛と文学，p. 142，講談社（1974）
 - 5) 同 上 p. 67
 - 6) 江藤 淳：決定版夏目漱石，p. 410～415，（要約），新潮社（1974）
 - 7) 同 上 p. 394
 - 8) 柄谷行人：夏目漱石全集別巻，p. 137，筑摩書房（1973）
 - 9) 越智治雄：漱石私論，p. 127～128，角川書店（1971）
- 参考 宮城音弥：夢第二版，全般，岩波新書（1972）